

New Glass 誌のこと

兵庫県立大学

矢澤 哲夫

Tetsuo Yazawa

University of Hyogo

平成 16 年より 2 年間、New Glass 誌の編集委員長を務めさせて頂いたので、本誌の編集に携わった者としての所感を、心に浮かぶままに若干申し述べたい。本誌は年 4 回の発刊であり、編集者としては、当然のことながら毎号どのような記事構成にするかが課題となるわけである。本誌を見れば、世界、少なくとも日本の最近のガラス業界及びガラス研究のおおよそのトレンドが分かるようにしたいというのが基本的なコンセプトである。これは“言うは易し行うは難し”の一例ではあるが、本誌は比較的よくその責を果たしているのではないかと思う。これは、ひとえに本誌 20 年の実績と寄稿者の努力の賜物であるが、幸いガラス業界が比較的纏まっており、学界、業界ともお互いに顔が見えることによることも大きいのではなかろうか。これが、セラミックス全体ということになれば、とてもそうはいかないであろうと思われる。

さて、号によって若干の差違はあるが、本誌は、巻頭言、特集、研究最先端、国家プロジェクトの紹介、やさしいニューガラス講座、ガラス研究機関訪問、新製品紹介、ニューガラス関連学会、新刊紹介、コラムより構成されてい

る。これらは、産官学の連携の場としてのニューガラスフォーラムの機関誌の責を果たすべく考えられた構成である。研究最先端は、学会、マスコミ等で話題性が高く、内容的にも高度な研究についての紹介、国家プロジェクトの紹介は、ここ数年、NEDO の委託で行っているナノガラスプロジェクトの紹介を行ってきた。今、小職が執筆しているコラムというのが、一番肩の凝らない読み物で読者との窓口になるものである。編集者として最も意を用い、かつ本誌の目玉となるのが、特集である。特集も I 及び II があり、特集 II については、隔号にて関連する ICG 等の大きな国際会議の紹介や新 JIS マーク制度等の主として官側の動き等の紹介を行ってきた。特集 I については、ガラスに限らずどの材料についても同様であろうが、材料自身の研究開発とその応用展開との両面のバランスを考えて編集した。材料自身の研究開発としては、例えば結晶化ガラス、ガラスの新規分析技術、シリカガラス等を取り上げた。応用分野としては、ガラスでは、環境、情報通信、バイオというところが、典型的な出口であろう。それにガラスというのは、歴史的にも確立された材料であるので、各種産業、例えば自動車、建設、家電等の各種業界において、どのようにガラスが使用されているかも非常に重要な点である。

本誌の販売促進ということで、本誌を東京駅前八重洲ブックセンターに置いてもらったが、月に1~2冊程度しか売れないというのが現状であり、やはり商売は厳しいとの実感を持った。しかし、本書の内容からしてもっと売れてもよいのに、という思いはどこかにある。

本誌の編集において、若干の心残りの点は、他材料との比較がやや手薄であったように思うことである。特にプラスチックとの比較を常にしておくことが重要で、ガラスは、これまでに、かなりの部分がプラスチックに代替されてきたように思う。ガラス瓶しかり、メガネレンズしかり、オプティカルファイバーしかりである。あるプラスチックの専門家に逆はありますかと問われて返答に窮したことを記憶して

いる。

本誌で特集として取り上げた、ニューガラスフォーラム20周年の座談会でも述べられているところであるが、ニューガラスフォーラムは、ガラスに関連する産官学の集まりの場であり、本誌はその広報的な役割を担うものである。情報に振り回されることなく、情報を十分に咀嚼した技術開発を遂行することにより、我が国固有の独創的な技術開発を推進し、世界から敬意を払われる国となるというのが、今後の我が国の進むべき道のように思われる。すでに排煙脱硫、脱硝等の環境浄化技術に良き先例がある。本誌によって、ガラスがこのような技術開発に少しでも貢献できることを願ってやまない。